

海外研修旅行が大学生の訪問国・母国の イメージ及び文化交流に対する関心に 与える影響

The Influence of Oversea Study Tour on University Students'
Cultural Exchange Interest and Their Images of Both Their
Mother Country and the Visited Country

小 川 将
永 井 暁 行
兵 藤 宗 吉

要 旨

本研究では研修旅行が訪問国（マレーシア）と母国（日本）に対するイメージ及び文化交流の関心に与える影響について検討した。調査は大学生13名を対象とした。研修前後において反応時間測定実験を行った結果、マレーシア・日本の両国に対してイメージが思い浮かびやすくなったことが示された。文化交流の関心については、感想文からカテゴリー分類を行ったところ、言語学習意欲や自文化の見つめ直しなどのカテゴリーが抽出された。本研究により、短期間での研修旅行において訪問国だけではなく、母国に対する認識にも影響を与えることが示唆された。

キーワード

海外研修, マレーシア, 異文化交流, 大学生, イメージの変化

背景と目的

国連世界観光機関（World Tourism Organization: UNWTO）によると、世界全体の国際観光客到着数は2010年から年々増加しており、2013年には10億8千7百万人に達した¹⁾。世界規模で観光旅行者が増加し続ける背景には交通機関の発達、地域情報の普及、宿泊施設の多様化、人々の生活水準の上昇といった社会・経済的要因があげられる²⁾。国際観光客到着数の内訳の多くがレジャーを目的とした旅行であるが、海外留学や研修旅行も国際観光客到着数に含まれる。独立行政法人日本学生支援機構が2012年に行った20歳代から40歳代を対象としたインターネット調査³⁾では、海外留学の動機の約5割が「語学を本場で学びたかったから」と回答し、4割が「視野を広げたかったから」と回答している。ここでの「視野」は「ものの考え方」と考えられる。すなわち、態度、価値観、信条、規範、行動に代表される文化⁴⁾の見方である。留学動機で高い割合を示している「視野の広がり」または「ものの考え方」の変化や成長に関する知見は心理学領域でも得られており、異文化接触により、受け入れ文化への肯定的客観的態度の形成、自文化の見直し、広い世界観の獲得、ステレオタイプや自文化中心主義の低減、自己知覚の拡大などにポジティブな効果が得られることが知られている⁵⁾。これらの知見は海外留学や駐在員を対象とした研究から得られたものである。

他方、海外留学と類似したものに海外への研修旅行がある。研修旅行は「業務や学業上必要とされる知識や技能を高めるために、ある特別の期間に現地に赴いて体験学習すること」とされる⁶⁾。全国修学旅行研究協会の調査⁷⁾では、2009年度に海外への研修旅行を実施した高等学校の数は563校であったが、2011年度ではその1.96倍である1,106校に達したと報告されている⁸⁾。その後も多少の増減があるものの、依然として1,000校前後を維

持っている。高等学校でも実施されているように、留学よりも短い期間であることも研修旅行の特徴といえよう。このように増加傾向にある研修旅行であるが、研修旅行のように短期間での旅行者に及ぼす影響について検討した研究はほとんど見受けられない。

国内の研修旅行の影響を検討した数少ない知見としては、訪問国に対するイメージの変容に関する研究がある。中村⁹⁾は日本人を対象に、韓国訪問という直接接触経験が親近感を促進し、韓国に対するイメージの好転につながるかという仮説を検討した。10泊11日の研修旅行（ホームステイを含む）の結果、韓国に対するイメージは15項目中12項目が肯定的なものへと好転した。このことから、短期間でも直接接触経験によりイメージが変容すると考えられる。浅野・兵藤¹⁰⁾は大学生を対象に、マレーシアへ7泊8日の研修旅行を行うことで、部分的なイメージの好転や内面的評価（他者への配慮、情報収集技能など）に変化が見られること、それらに一定の持続効果が見られることを示した。しかし、これまでの先行研究とは滞在日数や訪問国などの多くの条件が異なるため、これらの効果において研究間で比較することに限界を述べている。

相川¹¹⁾は高校生を対象に、シンガポールへの修学旅行前後での変化について、参加群と不参加群との比較を行った。その結果、「他国民・他民族に対する感情」などについては参加群において肯定的なイメージを示した。他方、国際的・政治的なイメージについては変化が見られず、このようなイメージはシンガポール国民と同レベルの生活が必要であると考察している。

これらの研究から、研修旅行を機に訪問国の諸側面に対するイメージが好転することが期待される。特に、他国民との接触がイメージの好転に寄与することが指摘されている。他方、中村¹²⁾によると、日本人の韓国に対するイメージ源は新聞・雑誌を含む報道が66.6%であり、実際の訪問経

験に基づくものは14.8%に過ぎない。さらに、報道の影響はステレオタイプを生むことが指摘されている¹³⁾。本研究の訪問先であるマレーシアなどの東南アジア諸国についても、「島」や「村」に偏っており、これもステレオタイプの形成につながるとされている。

本研究では中央大学心理学研究室で開催されているマレーシア研修旅行を教育的介入として捉え、研修旅行前後でのマレーシアに対するイメージ変化について心理学的研究手法を用いて検討する。訪問国であるマレーシアに対するイメージは浅野・兵藤がすでに検討しているが、日本に対するイメージについては検討されていない。訪問国のイメージについて評価や判断を行う際には、他国と比較することが考えられる。さらに、自文化の見直しが生じることも期待される。そのため、本研究では研修旅行先であるマレーシアのみならず、日本に対するイメージについて検討する。イメージについては肯定的または否定的な印象、思い浮かびやすさという2つの観点から検討する。教育的効果の測定には、研修旅行前後での語学学習の関心度・意欲、多文化理解度の測定、自文化の見直しや広い世界観の獲得などの主観的な意識の変化を検討する。

方 法

調査対象者

2012年度のマレーシア研修旅行（以下、研修）には大学生13名（1年生10名、2年生3名）、大学院生2名、教員1名、計16名が参加した。本調査においては大学生13名（男性4名、女性9名、平均年齢 19.25 ± 0.45 歳）を調査対象とした。Semantic Differential法（以下、SD法）や反応時間測定実験においては研修前後の両方の調査に協力した学生を分析対象とした。有効回答人数は、質問紙法による学習意欲・関心度および多文化理解度では6名、SD法による印象評定では5名、反応時間測定実験では6名、感想文では

13名であった。

調査時期

研修期間である3月4日－3月11日から約1か月前に事前調査を行った。事後調査は研修から約4か月後である7月に行った。

本研究の教育的介入を達成するため、第一著者が旅行スケジュールを組む際に以下の3点に焦点を当てた。1点目は、日本では見ることが出来ないジャングルなどの自然に触れることであった。この狙いは、研修の中でも楽しさを体験することで、海外の文化や語学への関心度や学習意欲を高めるためのものであった。2点目は、マレーシアの歴史や文化に触れ、実体験として学ぶことであった。直接接触経験により相互理解が深まることが考えられるため¹⁴⁾、現地でのホームステイも組み込んだ。これらは多文化理解度を促進させることが目的であり、教養を高めるものとしての狙いであった。3点目は、都市部を散策することであった。これはメディアで頻繁に報道される「村」や「島」という側面ではなく、都市部の側面も知るためであった。

研修フィールド

研修はコタキナバルを中心に行われた。研修初日は日本とマレーシアとの移動に時間を費やしたため、実際の研修は2日目からであった。2日目にはコタキナバルのカザダン族の村にて伝統的なお菓子作りや遊戯などを体験した。3日目は終日自由行動であったが、マレーシアの歴史を学ぶために、サバ州イスラム博物館またはサバ州立モスクのどちらかに行くことが課された。4日目はキナバル国立公園にてマレーシアの生物について学んだ。5日目から6日目にかけてはドゥスン族が住むキアウという村にてホームステイを行った。ホームステイ先では村長の自宅にて会食を行

い、就寝時は事前に編成された班ごとに割り当てられた各々の家庭へ泊った。6日目は無人島での海水浴およびマリンスポーツなどを体験した。7日目はクアラルンプールを中心に都市部の散策活動を行った。全体のスケジュールについては表1に示した。

材 料

本研究の目的である、海外の文化や語学への学習意欲・関心度（以下、学習意欲・関心度）を測定するため、加賀美・箕浦・三浦・篠塚¹⁵⁾や加賀美・篠塚¹⁶⁾を参考に「国際教育・多文化交流に関する学習意欲」を問う質問項目を用いた。具体的な項目は「いろいろな国の学生と友だちになりたい」、「さまざまな国、社会、文化、そこに住む人々の考えを理解したい」、「自分の国・地域の文化や自分自身をみつめたい」、「環境・貧困など地球規模で起こる問題を総合的に理解したい」、「他国の人々や留学生に自分の考えや自国（日本）のことを話したい」、「国際協力に必要な知識や技能を学びたい」、「外国語で自由に討論できるようになりたい」、「世界各地の料理を作ったり、民族衣装を着たり、音楽・舞踊を実演してみたい」の全8項目から構成されていた。これらは「1=全くあてはまらない」から「5=最も当てはまる」の5件法で評定を求めた。

多文化・多文化社会における理解度（以下、多文化理解度）の測定には、加賀美ら¹⁷⁾に基づき多文化理解態度尺度内の14項目を採用した。参加者は「もしあなたが様々な国の人と一緒に仕事をするとしたら、次のようなことが重要だと思いますか。」という教示文に対してそれぞれの項目に回答した（例：文化、価値観、考えの違いを当然だと受け止められる）。全質問項目において「1=全くあてはまらない」から「5=最も当てはまる」の5件法で評定を求めた。

3つ目の目的であるマレーシア及び日本に対するイメージの変化を検討

するために、本調査ではSD法を用いた。SD法とは相反する形容詞を対にして一軸上に配置し (e.g., 強い—弱い, あつい—つめたい), それを7段階にて評定者に概念の判断を求める方法¹⁸⁾ である。本調査では浅野・兵藤¹⁹⁾ 及び加賀美ら²⁰⁾ で使用された項目を参考に計23項目を使用した。7段階評定であり、左から「1=非常に：2=かなり：3=やや：4=どちらともいえない：5=やや：6=かなり：7=非常に」の順に配置され、両端に近づくほどイメージが強いことを示すものであった。

さらに、イメージの思い浮かびやすさを測定するため、反応時間測定実験を行った。反応時間測定実験はパーソナルコンピュータ画面上で行い、刺激呈示プログラム ExpLab²¹⁾ を用いて行われた。反応時間測定実験に使用される形容詞は浅野・兵藤²²⁾ および加賀美ら²³⁾ でSD法に使用された項目を参考に選定した。

手 続 き

本調査は事前調査と事後調査の2回の調査から構成された。事前調査は研修から1か月前に行われ、事後調査は研修から約4か月後に行われた。事前調査では調査者から本調査の説明が行われた。同意が得られた大学生を対象に質問紙法による調査が行われた。質問紙はフェイスシート1枚、学習意欲・関心度を問う質問1枚、多文化理解態度を問う質問1枚、計4枚で構成されていた。フェイスシートでは性別、年齢、名前、海外経験の有無、海外に行った期間、ホームステイ経験を記入するように求めた。

SD法によるマレーシアと日本に対する印象調査および反応時間測定実験は実験室にて行われた。実験の手続きは鈴木・小川²⁴⁾ の手続きに準じて行った。反応時間測定実験ではパーソナルコンピュータの画面に文章が呈示され、自分が抱いているイメージがその文章に当てはまっているかどうかを求めた。はじめに注視点(+)が1500msまたは2000msで呈示さ

れた。その後、「マレーシアは冷たい」などの主語（マレーシアまたは日本）と述語（形容詞）から成る文章が呈示された。対象者は呈示された文章が自分のイメージに当てはまっている場合には「Fキー」を当てはまっていない場合には「Jキー」をできるだけ早く、かつ正確に押すように求めた。これらを1試行とし、各形容詞がランダムに呈示され、全120試行行われた。文章の呈示順と注視点の呈示時間はランダムであった。反応時間測定実験の後、参加者は引き続きSD法に回答した。マレーシアに対する印象をSD法にて求める質問が2枚、日本に対する印象を求める質問紙2枚であり、計4枚から構成されていた。日本とマレーシアに対する質問項目は同じものであり、それぞれ22項目であった。

事前調査と事後調査の質問内容は同じものであった。各調査の終了後には内観報告を求めた。事前調査ではマレーシアと日本のイメージのしやすさについて、マレーシアに期待していることについて報告を求めた。事後調査においてはマレーシアと日本のイメージのしやすさ、旅行前後での自身の変化についての感想文を1200字程度で求めた。提出期間は帰国後から2週間以内と定めた。感想文の結果については、カテゴリー分類を行い検討した。カテゴリー命名は著者が行い、著者に加えた2名の大学院生がそれぞれ独立に行った。

海外研修旅行が大学生の訪問国・母国のイメージ及び……

表1 2012年度マレーシア研修旅行のスケジュール

日時	都市名		時刻	交通機関	スケジュール
3月4日(月) (1日目)	成田空港集合		8:00		成田空港第2旅客ターミナル 3階 Iカウンター集合
	東京(成田)	発	10:30	MH089	マレーシア航空089便にてクアラランプールへ (エコノミークラス・所要時間7時間35分)
	クアララン プール	着			
	クアララン プール	発	17:05	MH2606	マレーシア航空2606便にてコタキナバルへ (エコノミークラス・所要時間2時間35分)
	コタキナバル コタキナバル	着 発	19:00 21:35	専用車	空港よりホテルへ ※日本時間-1時間がマレーシア時間 (プロムナードホテル泊)
3月5日(火) (2日目)	ホテル ババール	発 着	9:00 10:00	専用車	午前:ババール郊外へ向け出発 カザダン族の村訪問 サゴヤシの収穫・お菓子作り、イモ虫の試食など 現地民族との交流および昼食
	ババール ガラマ川	発 着	15:00 16:30		
	ガラマ川	発	19:30	ボート分乗	午後:ガラマ川リパークルーズ ボート乗船し、テングザル、カニクイザルなどの野生動物の視察
	ホテル	着	21:30		夜:夕食後、ホテル鑑賞(雨天の場合は中止) (プロムナードホテル泊)
	コタキナバル				終日:フリータイム 各班ごとに自由行動 センターポイント・セントラルマーケットでショッピング (プロムナードホテル泊)
3月6日(水) (3日目)	コタキナバル				
	ホテル	発	7:30	専用車	朝:キナバル公園へ向けて出発 途中、景色の美しいポイントにて休憩
	キナバル公園	着	10:00		
	キナバル公園 ポーリン温泉	発 着	13:00 14:00		午前:公園内植物にてジャングル体験 公園内散策後、昼食
	ポーリン温泉 キアウ村	発 着	15:30 17:00		午後:キャノピーウォーク体験で樹冠の観察など 夕方:キアウ村の民家にホームステイ ドゥッスン族の生活体験 夕食(地元料理)を共にして村人たちとの交流 (キアウ村・ホームステイ)
3月7日(木) (4日目)	キアウ村				
	キアウ村	発	14:00	専用車	午前:バイナップル畑の見学と村の近隣で ジャングルトレッキング (途中、プロムナードホテルにて荷物積み込み)
	ホテル	着	16:30		夕刻:タンジュアルホテルにチェックイン 夕食は班ごとに (タンジュアルホテル泊)
3月8日(金) (5日目)	キアウ村				
	キアウ村	発	14:00	専用車	午前:バイナップル畑の見学と村の近隣で ジャングルトレッキング (途中、プロムナードホテルにて荷物積み込み)
	ホテル	着	16:30		夕刻:タンジュアルホテルにチェックイン 夕食は班ごとに (タンジュアルホテル泊)

3月9日(土) (6日目)	ホテル サビ島 サビ島 ホテル	発 着 発 着	9:00 9:30 15:30 16:00	ボート ボート	午前：ホテル内棧橋よりボートにてサビ島へ サビ島にて海水浴・マリンスポーツの体験 午後：ボートにてホテル棧橋へ 夕食は班ごとに (タンジュアルホテル泊)
3月10日(日) (7日目)	ホテル コタキナバル クアラルン プール	発 発 着	9:00 9:00 12:00	専用車 MH2623 専用車	ホテルより空港へ マレーシア航空 MH2613便にてクアラルンプールへ (エコノミークラス利用・所要時間2時間25分) 空港よりホテルへ ホテルチェックイン後、フリータイム 班ごとにホテルや屋台で食事 (フラマ・プキピンタン泊)
3月11日(月) (8日目)	ホテル クアラルン プール 東京(成田)	発 発 着	11:00 11:00 19:40	専用車 MH092	ホテルより空港へ マレーシア航空 MH092便にてクアラルンプールへ (エコノミークラス利用・所要時間7時間40分) 研修旅行終了

結 果

関心度・学習意欲および多文化理解度

研修前後での関心度・学習意欲の平均値、標準偏差、最大値、最小値を算出した(表2)。研修前時点で平均値が3.88であり、研修前に比べて研修後では関心度・学習意欲の平均値が高かった。また、最小値および最大値においても研修前よりも研修後において高い値を示した。研修前よりも研修後において平均値が高かった項目は「いろいろな国の学生と友達になりたい」、「他国の人々や留学生に自分の考えや自国(日本)のことを話したい」、「外国語で自由に討論できるようになりたい」の3項目であった。一方、「自分の国・地域の文化や自分自身をみつめたい」については研修前より研修後で低い値を示した。その他の項目については研修前後での平均値は同じであった。

研修前後での関心度・学習意欲について Wilcoxon の符号順位和検定を行ったところ、有意差は見られなかった ($Z=0.82, p=0.41$)。

表2 研修前後における関心度・学習意欲の記述統計と検定結果 ($n=6$)

研修前					研修後				
<i>M</i>	\pm	<i>SD</i>	<i>Max</i>	<i>Min</i>	<i>M</i>	\pm	<i>SD</i>	<i>Max</i>	<i>Min</i>
3.88	\pm	0.35	4.38	3.50	3.98	\pm	0.37	4.63	3.63

5%水準による検定

多文化理解度においても同様に、平均値、標準偏差、最大値、最小値を算出した(表3)。研修前時点での平均値は3.76であり、研修前に比べて研修後では多文化理解度の平均値が高かった。しかし、最大値においては、研修前よりも研修後において低い値を示した。

研修前よりも研修後において平均値が高かった項目は「文化、価値観、考えの違いを当然だと受け止められる」、「異なる文化のもとでは相手文化の価値観を尊重し合わせられる」、「共同体としての世界や地球という視点でものごとが考えられる」、「人間関係が上手くいかなかった時でも、感情的にならず冷静に対応できる」、「考え方の違う人々の間でもリーダーシップをとり、企画を進めていける」、「いろいろな言語や文化を重視する」、「共通の目標に向かって協力して問題解決ができる」の7項目であった。研修前後での多文化理解度について Wilcoxon の符号順位と検定を行ったところ、有意差は見られなかった ($Z=0.73, p=0.46$)。

表3 研修前後における多文化理解度の記述統計と検定結果 ($n=6$)

研修前					研修後				
<i>M</i>	\pm	<i>SD</i>	<i>Max</i>	<i>Min</i>	<i>M</i>	\pm	<i>SD</i>	<i>Max</i>	<i>Min</i>
3.76	\pm	0.56	4.79	3.14	3.89	\pm	0.25	4.36	3.64

5%水準による検定

マレーシアおよび日本に対するイメージ

SD法による印象評定は、肯定的なものであると判断した値については

高くなり、否定的なものであると判断した値については低くなるように算出した。評定時に対となっている形容詞に対して最も否定的な評定を行った場合には1点であり、最も肯定的な判断を行った場合には7点であった。そのため、評定値の範囲は1点～7点であった。

研修前後でのマレーシアに対する印象は、全体として研修前と比べて研修後では肯定的な値を示していた(図1)。研修前時点では「4 = どちらともいえない」よりも低い値を示した項目が「後進的な—先進的な」、「理解しにくい—理解しやすい」、「貧しい—豊かな」、「原始的な—近代的な」、

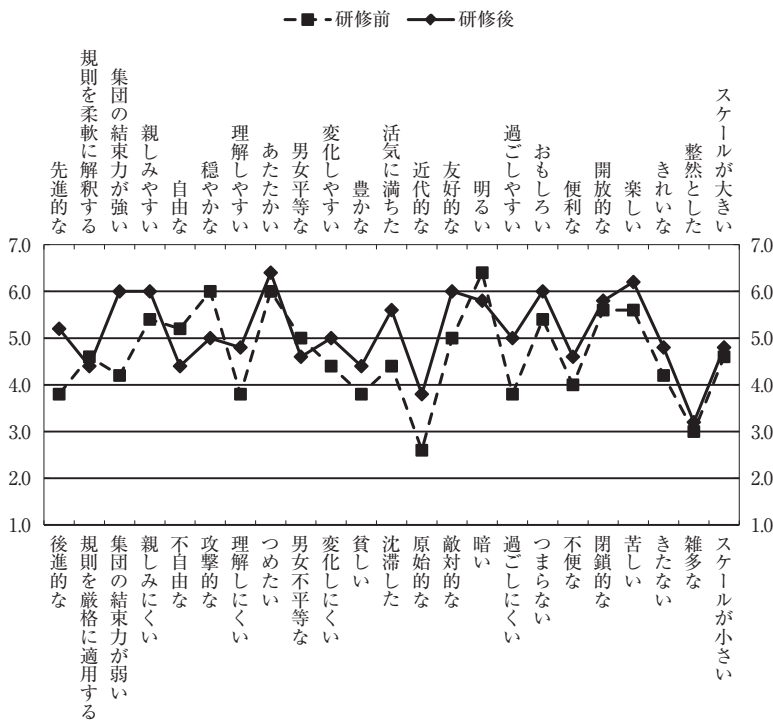


図1 研修前後でのマレーシアに対するイメージの変化 (n=5)

表4 研修前後におけるイメージ項目ごとの平均値と標準偏差 (n=5)

質問項目	マレーシア		日本	
	研修前	研修後	研修前	研修後
1. 後進的—先進的	3.80 ± 1.10	5.20 ± 0.45	6.40 ± 0.55	6.20 ± 0.45
2. 規則を厳格に適用する—規則を柔軟に解釈する	4.60 ± 1.14	4.40 ± 1.14	2.60 ± 1.95	2.80 ± 1.30
3. 集団の結束力が弱い—集団の結束力が強い	4.20 ± 1.30	6.00 ± 0.71	5.40 ± 1.52	5.00 ± 1.22
4. 親しみにくい—親しみやすい	5.40 ± 0.55	6.00 ± 1.00	5.60 ± 1.34	4.80 ± 1.79
5. 不自由な—自由な	5.20 ± 1.10	4.40 ± 2.07	5.20 ± 0.84	4.60 ± 1.14
6. 攻撃的な—穏やかな	6.00 ± 0.71	5.00 ± 2.35	6.20 ± 1.30	4.60 ± 1.82
7. 理解しにくい—理解しやすい	3.80 ± 0.84	4.80 ± 0.84	4.80 ± 1.92	4.80 ± 1.48
8. つめたい—あたたかい	6.00 ± 1.22	6.40 ± 0.89	4.00 ± 1.58	4.40 ± 1.34
9. 男女不平等な—男女平等な	5.00 ± 0.71	4.60 ± 0.89	4.00 ± 1.00	3.80 ± 1.64
10. 変化しにくい—変化しやすい	4.40 ± 1.82	5.00 ± 1.22	5.60 ± 1.67	3.80 ± 1.64
11. 貧しい—豊かな	3.80 ± 1.10	4.40 ± 0.55	6.00 ± 1.22	5.60 ± 0.89
12. 沈滞した—活気に満ちた	4.40 ± 1.82	5.60 ± 0.55	4.60 ± 1.14	4.80 ± 1.10
13. 原始的な—近代的な	2.60 ± 1.14	3.80 ± 0.84	6.60 ± 0.55	6.40 ± 0.55
14. 敵対的な—友好的な	5.00 ± 1.87	6.00 ± 0.71	4.80 ± 1.48	5.00 ± 0.71
15. 暗い—明るい	6.40 ± 0.89	5.80 ± 0.84	4.20 ± 1.10	4.40 ± 1.52
16. 過ごしにくい—過ごしやすい	3.80 ± 1.10	5.00 ± 0.00	5.60 ± 1.14	6.00 ± 1.00
17. つまらない—おもしろい	5.40 ± 1.14	6.00 ± 0.71	5.20 ± 1.30	5.20 ± 1.10
18. 不便な—便利な	4.00 ± 1.00	4.60 ± 0.89	6.40 ± 0.55	6.40 ± 0.55
19. 閉鎖的な—開放的な	5.60 ± 0.55	5.80 ± 0.45	5.20 ± 0.84	4.40 ± 1.52
20. 苦しい—楽しい	5.60 ± 0.55	6.20 ± 0.45	5.60 ± 1.34	5.80 ± 0.84
21. きたない—きれいな	4.20 ± 1.30	4.80 ± 1.30	6.00 ± 0.71	6.00 ± 0.71
22. 雑多な—整然とした	3.00 ± 1.00	3.20 ± 1.10	3.60 ± 1.34	3.40 ± 1.67
23. スケールが小さい—スケールが大きい	4.60 ± 1.14	4.80 ± 0.84	4.60 ± 1.14	4.40 ± 1.52

「過ごしにくい—過ごしやすい」, 「雑多な—整然とした」6項目であったが、研修後では「原始的な—近代的な」, 「雑多な—整然とした」の2項目であった(表4)。「原始的な—近代的な」, 「雑多な—整然とした」の2項目においては、研修前よりも研修後において平均評定値が高い値を示していた。研修後において最も変化が大きかったのは「集団の結束力が弱い—

「集団の結束力が強い」であり、平均評定値が1.8点高かった。次に「後進的な—先進的な」では、研修前 비해研修後で平均値が1.4点高く、標準偏差も他の項目と比べ0.45と小さな値を示した。

研修前後での日本に対する印象においては、マレーシアに対する印象とは対照的に、全体として研修前と比べて研修後では否定的な値を示した(図2)。研修前では「4 = どちらともいえない」よりも低い値を示した項目が「規則を厳格に適用する—規則を柔軟に解釈する」, 「雑多な—整然とした」の2項目であったが、研修後では「男女不平等な—男女平等な」「変化しにくい—変化しやすい」が加わり、計4項目が平均値4.0を下回った。

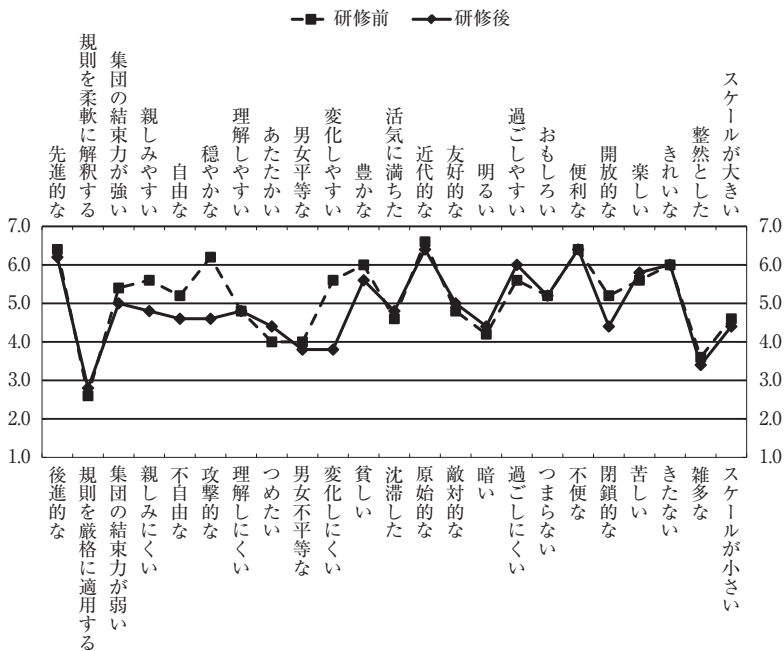


図2 研修前後での日本に対するイメージの変化 (n=5)

しかし、これらの項目はいずれも標準偏差が1.3以上であり、他の項目と比較してばらつきが大きかった。最も平均値の違いが大きかったのは「変化しにくい—変化しやすい」であり、研修後において平均値が1.8低かった。次いで「攻撃的な—穏やかな」が大きく変化しており、研修前と比べ研修後では平均値が1.6低かった。標準偏差はいずれも他の項目に比

表5 研修前後におけるイメージ項目ごとの優越率 (n=5)

質問項目	マレーシア				日本			
	減少	向上	変化なし	優越率	減少	向上	変化なし	優越率
1. 後進的な—先進的な	0	4	1	0.80	1	0	4	0.00
2. 規則を厳格に適用する—規則を柔軟に解釈する	1	0	4	0.00	1	2	2	0.40
3. 集団の結束力が弱い—集団の結束力が強い	0	4	1	0.80	1	4	0	0.80
4. 親しみにくい—親しみやすい	0	3	2	0.60	3	0	2	0.00
5. 不自由な—自由な	2	1	2	0.20	1	4	0	0.80
6. 攻撃的な—穏やかな	2	1	2	0.20	0	4	1	0.80
7. 理解しにくい—理解しやすい	0	4	1	0.80	2	2	1	0.40
8. つめたい—あたたかい	1	3	1	0.60	2	3	0	0.60
9. 男女不平等な—男女平等な	2	1	2	0.20	3	2	0	0.40
10. 変化しにくい—変化しやすい	2	3	0	0.60	3	0	2	0.00
11. 貧しい—豊かな	1	3	1	0.60	0	4	1	0.80
12. 沈滞した—活気に満ちた	1	3	1	0.60	1	4	0	0.80
13. 原始的な—近代的な	0	4	1	0.80	1	0	4	0.00
14. 敵対的な—友好的な	1	3	1	0.60	0	3	2	0.60
15. 暗い—明るい	2	0	3	0.00	1	3	1	0.60
16. 過ごしにくい—過ごしやすい	0	3	2	0.60	0	5	0	1.00
17. つまらない—おもしろい	1	3	1	0.60	0	4	1	0.80
18. 不便な—便利な	0	2	3	0.40	0	0	5	0.00
19. 閉鎖的な—開放的な	0	1	4	0.20	1	4	0	0.80
20. 苦しい—楽しい	0	2	3	0.40	0	5	0	1.00
21. きたない—きれいな	1	2	2	0.40	0	5	0	1.00
22. 雑多な—整然とした	2	1	2	0.20	2	3	0	0.60
23. スケールが小さい—スケールが大きい	1	2	2	0.40	1	4	0	0.80

べ大きく、「変化しにくい—変化しやすい」では1.64, 「攻撃的な—穏やかな」では1.82であった。

研修前後において、イメージの評定値が減少した人数（減少）、向上した人数（向上）、変化しなかった人数（変化なし）、および優越率を算出した（表5）。優越率は「すべての被験者のうち、条件Aのもとでの得点 X_A が条件Bのもとでの得点 X_B よりも大きい被験者の割合」と定義される²⁵⁾。本調査では研修後の得点が研修前の得点よりも大きい対象者の割合を算出した。マレーシアにおいては、「後進的な—先進的な」, 「集団の結束力が弱い—集団の結束力が強い」, 「理解しにくい—理解しやすい」, 「原始的な—近代的な」が0.80を超えており最も高かった。一方、「規則を厳格に適用する—規則を柔軟に解釈する」, 「暗い—明るい」は0.00であり、肯定的なイメージへと向上した参加者はいなかった。日本においては、優越率が0.50を超えた項目は「暗い—明るい」, 「雑多な—整然とした」, 「集団の結束力が弱い—集団の結束力が強い」や「不自由な—自由な」などの15項目であり、その他の項目は0.50未満であった。「後進的な—先進的な」, 「親しみにくい—親しみやすい」, 「変化しにくい—変化しやすい」, 「原始的な—近代的な」, 「不便な—便利な」の5項目は0.00であり、これらの項目においては向上した参加者は見られなかった。

反応時間測定実験

研修前後でのマレーシアと日本に対するイメージの思い浮かびやすさを検討するため、研修前後でのマレーシアおよび日本に対するイメージが思い浮かぶまでの反応時間について検討した。2（国；マレーシア, 日本）× 2（測定時期；研修前, 研修後）について2要因の分散分析を行ったところ²⁶⁾, 測定時期の主効果が見られ、研修前よりも研修後の方が有意に反応

表6 研修前後におけるマレーシアおよび日本のイメージの平均反応時間と標準偏差 ($n=6$; 単位ms)

	研修前			研修後		
	<i>M</i>	±	<i>SD</i>	<i>M</i>	±	<i>SD</i>
マレーシア	1729	±	236	1460	±	286
日本	1708	±	447	1471	±	361

時間が短かった ($F(1,5)=21.95, p<.01$)。国の主効果 ($F(1,5)=0.003, n.s.$) および交互作用 ($F(1,5)=0.24, n.s.$) は見られなかった。

記述内容のカテゴリー分類

感想文について記述のカテゴリー分類を行った。まず、第一著者が13名の感想文から5名以上に得られた同一内容の文章(キーセンテンス)を38センテンス収集した。その後、類似したキーセンテンス同士をまとめ、それらに対して適切であると判断されたカテゴリー名を命名した。その結果5つのカテゴリーが生成された。第1カテゴリーについては記述内容からマレーシアという国や環境による不安についての記述を読み取ることができたため、「未知に対する不安」と命名された。第2カテゴリーについては記述内容から現地での交流による人々の優しさ・温かさについての記述を読み取ることができたため、「現地住民の温かさの体感」と命名された。第3カテゴリーについては記述内容から語学の発達や獲得への意欲についての記述を読み取ることができたため、「語学学習意欲の向上」と命名された。第4カテゴリーについては記述内容から異文化体験を通した自国文化の見直しについての記述を読み取ることができたため、「自文化の見直し」と命名された。第5カテゴリーについては記述内容から様々な文化や体験への興味関心が刺激され、視野を広げていくことへの意欲についての記述を読み取ることができたため、「広い世界観の獲得」と命名された。

表7 感想文に基づくカテゴリー分類

カテゴリー名	記述例
未知に対する不安 キーセンテンス数 (9)	一体どんな国なのだろうと不安もあった 不安が大きかった トイレや水道など、衛生面に不安がありました マレーシアについてほとんど何も知らない状態でした マレーシア、と聞いて思い浮かぶことがほとんどなかった
現地住民の温かさの体感 キーセンテンス数 (7)	現地の人たちも温かい人ばかり みなさん優しく素敵な人ばかり 現地の人々の温かさ 自然あり都会ありの温かい国 会う人たちがすごく優しくて
語学学習意欲の向上 キーセンテンス数 (5)	もっと語学を伸ばしたいと思った 英語に対する考え方も変わった 英語力を身につけたいという思い 会話を通して自分の気持ちを伝えられるようになりたい 言語ってとても大事なものだと思いました
自文化の見直し キーセンテンス数 (10)	日本との政策の違い、価値観の違い 日本がいかにかまれた国かということを考えさせられた 外からの視点で見ることで見えてくる日本の側面もある 母国である日本の魅力も再発見することができました 日本を見つめ直すきっかけにもなりました
広い世界観の獲得 キーセンテンス数 (7)	もっといろんな国に足を運び、いろいろな違いを発見してみたい 海外の動向に興味を持ち、目を向けてみようとも思った 色々な文化や景色をみてみたいと思うようになった 視野を広げて行動的に生きようと思いました もっとたくさん海外旅行したいと思いました

キーセンテンスに対応したカテゴリー分類の信頼性を高めるため、心理学を専攻する大学院生2名によって改めてカテゴリー分類が行われた。カテゴリー分類は独立して行われた。カテゴリー分類を行う2名は前述の命名されたカテゴリー名とキーセンテンスの一覧を用い、キーセンテンスに対応するカテゴリーを選定した。以上の分類について信頼性があるかを確認するために第一著者と大学院生2名の計3名によるカテゴリー分類の一致係数(Cohen's Kappa)を算出した。その結果、評定者A-B間で $k=1.00$ 、評定者A-C間で $k=0.88$ 、B-C間で 0.88 という一致係数が得られた。いずれも高い一致係数であったことから、このカテゴリー分類の信頼性が確認された。一致しなかった項目に関しては討議の結果除外した。

考 察

本研究の目的は、1) 日本に対する印象およびマレーシアに対する印象、思い浮かびやすさと印象について検討すること、2) 教育的効果として研修旅行前後での語学学習の関心度・意欲、多文化理解度、主観的な意識の変化を検討することであった。

マレーシアに対する印象と日本に対する印象についてはサンプル数が少なかったため、記述統計に基づいて考察する。マレーシアに対する印象と日本に対する印象については対照的な結果となった。マレーシアに対する印象は研修前より研修後において肯定的な得点が高かった。「後進的な—先進的な」、「原始的な—近代的な」という項目については平均値においても優越率においても高い値を示した。これは浅野・兵藤²⁷⁾の研究においても同様の結果であった。また、感想文でマレーシアが都会であることに驚愕したという報告と一致している。標準偏差の値が低いことから、多くの参加者が高い評定を行ったといえる。「集団の結束力が弱い—集団の結束力が強い」については、カザダン族の村やドゥスン族の村でホームステイしたことが影響した可能性がある。村という1つの集団のイメージが強く残ったことが推察される。

日本に対する印象については、研修前より研修後において肯定的な得点が低かった。最も平均値の差が大きかったのは「変化しにくい—変化しやすい」であり、「変化しにくい」という印象になった。これはマレーシアとの比較によって生じた結果であると考えられる。日本が国として発展しているものの、参加者が予想していた以上にマレーシアが発展している印象があったため、相対的に「変化しにくい」という印象になったのであろう。次いで「攻撃的な—穏やかな」と「親しみにくい—親しみやすい」が否定的に変化した。これらの項目においても、マレーシアで現地住民と触れ

合うことやスローライフを経験したため、相対的な評定を行い日本の平均値が下がったと考えられる。

反応時間測定実験から、研修後では研修前よりもイメージが思い浮かびやすくなることが示唆された。マレーシアについては参加者の中に渡航経験者がいなかったため、イメージそのものが困難だったことが考えられる。

海外の文化や語学への関心度・学習意欲については、研修前後において大きな変化は見られなかった。しかしながら、8項目のうち3項目は研修前よりも研修後の方が高い値を示していた。研修後で高くなった項目が全て言語に関するものであった。感想文においても4人が言語への関心度が高くなった旨を報告していることから、本研修を通してわずかながらではあるものの言語への関心度・意欲の向上効果が得られたと考えられる。多文化理解度についても研修前後において大きな変化はみられなかったものの、研修前と比べ研修後ではわずかに平均値が高かった。14項目のうち向上した項目は7項目、減少した項目は5項目、変化しなかった項目は2項目であった。このように一貫した結果にならなかった理由として、本尺度の特性にある可能性がある。本尺度の教示文は「様々な国の人と一緒に仕事をするとしたら、次のようなことは重要だと思いますか。」というものであった。海外経験が豊富ではない本調査の対象者において仕事場をイメージすることが困難であったと考えられる。

感想文においては5つのカテゴリーに分類された。第1カテゴリーの「未知に対する不安」では、参加者が研修旅行に不安を覚えていたことが示されている。このことから、参加者にとって今回の研修に対して抵抗感があったことが窺える。しかしながら、第2カテゴリーの「現地住民の温かさの体感」、第3カテゴリーの「語学学習意欲の向上」、第4カテゴリーの「広い世界観の獲得」、第5カテゴリーの「自文化の見直し」に分類さ

れたように、肯定的なものが4 カテゴリー抽出された。第2 カテゴリーの「現地住民の温かさの体感」は中村²⁸⁾が指摘していたように、直接接触経験が親近感を促進した結果と推察される。第4 のカテゴリー「広い世界観の獲得」、第5 カテゴリーの「自文化の見直し」については、これまでの心理学的研究のポジティブな効果として得られており²⁹⁾、本研究においても追認された。以上の結果から部分的に教育的効果が見られたといえる。

しかし、第1 カテゴリーの「未知に対する不安」が抽出されたように、研修旅行の募集の際に今回の参加者以外についても、参加者同様に不安を抱いていたことが考えられる。訪問国へ赴く前に解消されなかった不安により、参加者が少なくなったことが推察される。不安を取り除くことで多くの参加者を募り、学生に学習の機会を与えることが重要であろう。

限界と展望

本研究では人数の制約により検討手法が限定されたものとなったものの、今後の展望としてマレーシアに対する肯定的な変化および日本に対する否定的な変化が起きる可能性があることが窺える。今回の研修旅行では旅行会社との提携によりプランが立てられた。したがって、治安が悪い場所や社会情勢が際立つ地域は積極的に避け、イメージが良い地域への視察が主であった。今後は研修前に研修先の肯定的な面と否定的な面の両面について事前学習を行い、多面的な視点を持った上で研修に参加することで、どのように印象変化に影響を与えるかを検討することも必要である。

思い浮かびやすさについては、研修前より研修後で思い浮かびやすくなったと考えられる。これは研修により参加者がイメージを思い浮かべるための情報源を得ることができたためと考えられる。事前調査での内観報告では「マレーシアについてあまり知識もなくイメージがわからないため、判断が難しい」というものや、「日本に対するイメージはマレーシアより

も知識があるため、マレーシアと比べて日本の方がイメージしやすかった」という報告が見られた。しかし、「日本は逆にいろいろなものを知りすぎているために判断に迷うものもあった」という報告も見受けられ、すべての項目に判断過程が同じであるとは一概にはいえないだろう。これらのことから「イメージがしにくい」という判断は2つあると考えられる。1つ目は、判断する対象について知識がないため、そもそもイメージが浮かばないパターンである。2つ目は、判断する対象について多くの知識や諸側面を知っているがゆえに判断できないパターンである。これらの点については参加者の判断対象への知識を踏まえ、判断するまでの過程について詳細に検討することが求められる。

本研究結果から、研修旅行前後での日本およびマレーシアに対するイメージ、語学学習の関心度・意欲、多文化理解度について一定の効果が見られることが示唆された。しかし、いずれの解析においてもサンプルサイズが小さく、統計解析が行うことができないものもあった。今後は多くの参加者を募り、信頼性が高い検討を行う必要がある。さらに、感想文で参加者が変化したと報告しているものを測定する指標を選定することで研究の妥当性が高まり、より客観的な効果評価を行うことができるであろう。

注

- 1) UNWTO Tourism Highlight 2014 Edition <http://mkt.unwto.org/publication/unwto-tourism-highlights-2014-edition>
- 2) 林幸文・藤原武弘「訪問地域、旅行形態、年齢別にみた日本人海外旅行者の観光動機」(『実験社会心理学』48号, 2009) 139-163頁。
- 3) 独立行政法人学生支援機構 『平成23年度 海外留学経験者追跡調査報告書—海外留学に関するアンケート』 海外留学支援サイト http://ryugaku.jasso.go.jp/link/link_statistics/link_statistics_2012/
- 4) D. マツモト 南雅彦・佐藤公代(監訳)『文化と心理学 比較文化心理学入門』北大路書房, 2001年, 59-82頁。

- 5) 大西晶子「異文化間接触に関する心理学的研究についてのレビュー——文化的アイデンティティ研究を中心に」(『東京大学大学院教育学研究紀要』41号, 2002) 301-310頁。
- 6) 野内類・兵藤宗吉「テキストマイニングを用いた研修旅行の効果に対する教育・文化心理学的検討」(『人文研紀要』65号, 2009) 139-163頁。
- 7) 全国修学旅行研究協会『全国公私立高等学校海外(国内)修学旅行・海外研修実施状況調査報告』修学旅行ドットコム <http://shugakuryoko.com/chosa/kaigai/>
- 8) ここで示す研修旅行は、学校が主催する語学研修、ホームステイ、実習、姉妹校交流などの実施状況をまとめたものであり、3か月未満の滞在期間に限定されている。さらに修学旅行は対象外としている。なお、全国修学旅行研究協会の調査では「海外研修」という用語を用いているが、本研究における「研修旅行」と相違がないと判断したため、本文中には「研修旅行」と記した。
- 9) 中村均「直接接触による日本人の対韓イメージの変化について：大学生・研修旅行の場合」(『アジア研究所紀要』)13号, 1986) 250-229頁。
- 10) 浅野昭祐・兵藤宗吉「海外研修が大学生の内面的評価及び訪問国のイメージに及ぼす影響」(『人文研紀要』72号, 2011) 45-64頁。
- 11) 相川充「高校生の海外修学旅行が訪問国に対するイメージと国際理解に及ぼす効果」(『東京学芸大学紀要出版委員会』2号, 2007) 81-90頁。
- 12) 注9)に同じ。
- 13) アディ・ミルサンディ「日本のテレビにおけるインドネシアのイメージ：NHKのインドネシアドキュメンタリ番組の考察」(『年報人間科学25号』, 2004) 85-112頁。
- 14) 注9)に同じ。
- 15) 加賀美常美代・箕浦康子・三浦徹・篠塚英子「グローバル文化学に関心のある学生はどのような学生か？」(『お茶の水女子大学人文科学研究』3巻, 2006) 174-178頁。
- 16) 加賀美常美代・篠塚英子「大学生の国際交流意識とグローバル教育：お茶の水女子大学の場合」(『お茶の水女子大学人文科学研究』2号, 2007) 245-265頁。
- 17) 注15)に同じ。
- 18) Osgood, C. E. 「semantic differential technique in the comparative study of cultures」(『*American Anthropologist*』)66(3), 1964) 171-200頁。
- 19) 注10)に同じ。

- 20) 注15) に同じ。
- 21) 兵藤宗吉・須藤智『認知心理学基礎実験入門』八千代出版, 2008年, 163-176頁。
- 22) 注10) に同じ。
- 23) 注15) に同じ。
- 24) 鈴木宏幸・小川将「大学生が抱く高齢者イメージの心像性と祖父母との被支援の接触頻度の関連」(『日本世代間交流学会誌』4 (1), 2014) 55-60頁。
- 25) 南風原朝和・芝祐順「相関係数および平均値さの解釈のための確率的な指標」(『教育心理学研究』35号, 1987) 259-265頁。
- 26) サンプルサイズは小さいが, Shapiro-Wilk の検定により正規分布が仮定されたためパラメトリック検定を行った。
- 27) 注10) に同じ。
- 28) 注9) に同じ。
- 29) 注5) に同じ。